

ED遲漏遺精 矯正裝置

山牧田 湧進



【まえがき】

※ 「注意ください」

- ・この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- ・この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- ・この作品は表現の誇張、強調や省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- ・特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- ・この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

男性性功能に関する研究と男性のエロスを追求するG博士がついにエロスとは真逆の方向の研究開発に手を染めた!?

その研究とはなんと、ED・遅漏・遺精に矯正する、というものだった。

え？ 助詞が間違っている？

いや、これで正しいのだ。

ED・遅漏・遺精を矯正して治すのではなく、正常に機能している男性を強制的にED・遅漏・遺精へと矯正してしまう。そんな研究なのである。

言うなれば、『矯正』という言葉遣いが間違っていたと言えるかもしれない。

しかし、物の見方を変えれば、その矯正を適用する相手如何によっては、『矯正』という言葉で正しいとも言えるのだ。

今回はそんな研究の初期実験をED・遅漏・遺精とは全く縁遠い性のスーパーマンであるG博士の助手が被験した。

短期実験のため、遅漏や遺精の癖が定着してしまうことはないだろうが、またも第一被験者となってしまうた蔵木は萎えたまま射精に至らされるその心地悪さに直面することになるであろう。

【主な登場人物】

・蔵木 宏彰（くらき ひろあき）

物語上の一人称「私」。複雑な生い立ちを持つ筋力と体力に優れた巨漢。

G博士との出会いは『精液分泌過剰促進剤』の被験者として抜擢されたことが始まり。群星とは保護兼世話役としての出会いが最初である。群星に課された大量精子提供問題の解決に蔵木がG博士へ協力を要請したことで三人が集結した。他者のDNAを取り込み易い性質があるらしく、能力強化がされた（と思われる）部分も多々存在する。意図的に強化された身体能力はDNA強化改変型後天性リアルスーパーマンの第一号とも呼ばれる。一方で、ドーピングをしなくても異様に性的能力が強いことが徐々に明らかになり、性的な点では先天性リアルスーパーマンと呼ばれることがある。大人のゆとりと色気と良い意味での隙きも持ち合わせていて、G博士の最もお気に入り。意外に欲深い。

・群星 光矢（むるぶし こうし）

物語上の一人称「僕」。人類に理解のできない記録の出し方をして生命を狙われる嵌めになった元超トップアスリート。蔵木に対比して先天性リアルスーパーマンの第一号とも言われる。高バランスの身体能力を持ち、特に強靱な筋力を持ち合わせつつの俊敏性の絶対的高さが蔵木に対するアドバンテージになる。精巣ドーピングの後遺症でまだ肥大化したままの睾丸が方で衝撃を生み、それが事態好転のきっかけにもなったりするラッキーボーイ。本来はゲイではなかったが、今では蔵木にべったり。馴れるに連れて未っ子的なキャラが目立つようにもなったが、そのお気楽さが達観から来ていることも。G博士の助手としての成長も著しい。

・G博士（Dr. G）

男性、および、男性の性機能に強い関心を持ち、極秘の研究を続ける科学

技術者。その分野では先端のさらに先を行っており、しかし、その研究成果はそのままでは公開されず、時間を置いてから公開できる部分だけを厳選して抜粋もしくは未公開のまま製品開発に移行されるため、G博士本人が発表のための論文を書くことは無い。学者界でも名を知られない人物だが、蔵木とは以前から縁があった。G博士本人はそれに全く気付いていない素振りを長年してきたが、本心か演技かは不明。

これまでのG博士の研究精果は『合法的に人格を破壊する方法』『精液分泌過剰促進剤』『超人幽閉！』『精巣ドーピング』『DNA Hacker』『地下精液闘技場』『アングラザーメンコロッセオ』『射精妨害拷問』『男性用妊娠補助薬の副作用』『機械線蟲 - Nanotechnology -』に記載されている。

【目次】

表紙	1
まえがき	2
あらすじ	3
主な登場人物	5
第1章 可能性を奪う実験	9
第2章 ED遅漏遺精矯正	20
第3章 性のスーパーマン	22
奥付	24

第1章

可能性を奪う実験

「ときに、諸君！ もし、自分が勃起出来なくなってしまうたら、どう思うかね？」

「え？ ……」

G博士が、側近の助手でかつ肉体的にも性的にもスーパーマンである蔵木と群星に唐突に問い掛けると、二人とも絶句してしまった。

これまでも二人が絶句するケースはたびたびあったかと思うが、今回の絶句は少々内容が異なる。

なにせ、G博士といえば、男性の性機能研究のエキスパートであり、男性のエロを追求するスケベオヤジの第一人者である。

そんな人物から『勃起出来ない』ということを話題として振られる、なんてことは、通常ならばとても考えられない、本当に本当にあり得ない話なのだ。

特に、常日頃からG博士の研究の実験台となり、過去には特別な処置を受けて部分的に肉体改造まで受けたこともある二人からすると、『勃起が収まらなくな

る』話ならまだしも『勃起出来ない』なんて話は天変地異に相当するほどの耳を疑う言葉だった。

「あの、今、何ておっしゃいました？」

蔵木は自分の耳を疑い、聞き間違いであるかも、と再確認しようとし、

「Dr・G、まさか、……御愁傷様です」

群星は早々に事態を受け入れて遺憾の意を表した。

「いや、あの、二人とも何を好き勝手に話を先回りしておるんじゃ。特に群星さん、顔面蒼白にまでなつとるがの、考え過ぎですぞ」

「だって、あの、あのDr・Gがインポ（テンツ）になるだなんて、世界の終わりですよ！」

「群星さん落ち着いて。この間、機械線蟲を仕込んだときに、Dr・Gが元気だったところを我々は見ているじゃないですか」

「そ、それだ、それですよ蔵木さん。それで、機械線蟲をきっかけに勃たなくなっちゃったんだ」

「だから、違う、って言ってんのに、ちゃんと話を聞いてくださいよ、群星さん」

「そ、それじゃあ、一応確認しておきますけど、Dr. Gが勃起出来なくなった、という話では、ないんですね？」

「当たり前じゃあ。わしゃあ、まだまだ現役ですよ」

「なあんだ」

「む、群星さん？ 群星さん!? い、今、『なあんだ』って、言いませんでした？ 言いませんでした?？」

「まあまあ、Dr. G。長いお付き合いの中で信頼関係がより深まったからこそ言える冗談ですよ」

と、蔵木はフォローに入ったが、

「あの、老いてなお盛んなDr・Gが、闇の男性性機能研究のトップランナーが機能不全とかなったら、面白そうだなあ、って思ったんですけどね」

群星はまだG博士をおちよくっていた。

「そりゃ、医者だって病気にはなるんじゃないから、性機能研究者が機能不全になってもおかしくはないんじゃないが、もし、わしが本当にそうになったら、下手したらお二人とも食いつぶぐれますぞ」

「やっぱり、研究出来なくなりますか？」

「やる気が無くなる可能性は充分にあるの」

「そ、それじゃあ、あと数年くらいは持つようにお祈りします」

群星は相変わらぬふざけた感じで手を合わせて拝んだ。

「群星さんは現金じゃの」

「で、話を元に戻して、お二人とも至極健康体で勃起には何一つ不自由していないと思うが、もし今、全く勃起出来なくなってしまったとしたら、どうじゃね？」

「うーん、想像つかないなあ」

群星は首を捻り天を見上げ、蔵木はより詳細な条件をG博士に確認した。

「あの、性欲とか精力が落ちて勃起出来なくなる、ってことですか？ それとも、性欲・精力はそのままでも勃起だけ出来ない……？」

「後者じゃな。今の元氣そのままでも、勃起だけが出来ない」

「ん〜な〜あ〜」

蔵木と群星が揃って苦悩の声を上げ出した。

「あり得ない！」

「想像しただけで地獄ですよ、Dr・G。変なこと聞かないでくださいよ」

二人とも不快感を思いつきりあわ頭あわにしている。

「耐え難いほどの苦痛かね？」

「当たり前です。元気なのに勃起出来ないんじゃ、射精もままならないし、下手したら快感も無くなるんですよね」

「まあ、不自由にはなるのお」

「うわ～～ああ～～」

二人とも頭を抱えてもんどり打った。

「ああ、やはり効果てきめんみたいじゃの。効いとる効いとる」

「そりゃあそうですよ、Dr・G。やる気そのものが無くなったら出来なくなっても気にも止めませんけど、やる気はあるのに出来ないとか生き地獄じゃないですか」

「想像するだけでストレスが溜まる」

G博士が苦笑いしながら頬っぺたをぽりぽりと搔いた。

「あはははは、まあ、今回はその、そういう方向の研究開発なんじゃ」

「ええっ!!」

二人は大袈裟に飛び跳ねて、矢継ぎ早に抗議を開始した。

「ちよちよちよ、ちよっと待ってくださいよ。今まで散々、精液を無理やり大量に作らせた」(群星にタッチ)

「精子の製造能力を拡大するために金玉50倍にしたり」(蔵木にタッチ)

「射精妨害しながら延々と快感を打ち込んで来たりしたり」(群星にタッチ)

「尿道に薬物仕込んでやたらと気持ち良く射精させたりしてきたようなお人が」
(蔵木にタッチ)

「よりにもよって、勃起させないとか」

「冗談がキツ過ぎます!」

が、G博士もこれだけの抗議を受けてもなお全く態度を変えずに聞き流しており、どうやら冗談抜きに本当に真面目な研究らしい。

「いや、これが割と有用なアイデアでしてな。もちろん、従来どおり特殊な拷問の一形態としても使えるものでもあるのじゃが、その、勃起しちやいけないような人達に適用するという使い道もあってじゃな」

蔵木がいち早く勘付く。

「！ 性犯罪者用ってことですか!?!」

「もちろん、人権問題みたいなものにも絡んでくるのでそう簡単に執行できるようになるとは思えんのじゃが、いうなれば現代版の去勢ですよな。物理的に切り取るという野蛮なことはしないけれども、役に立たないように矯正してしまおう、という。で、今回はそのプロトタイプの実験をじゃな」

「パス!」「パス!!」

蔵木も群星も、G博士が全てを言う前に全力で拒絶した。

「お二人とも物凄い嫌がりようですな。実験そのものは短期間で済ませ、後遺症も長引かせないように気を付けますんで、ここはどうか協力してやってはもらえ

ませんかの？」

「Dr・Gがまずご自身でやられてみてはいかがでしょう。この前の『機械線蟲』みたいに消化不良な結果になっても何なんですし」

「ああ、わしがやるとな、そのまま勃起不全が定着してしまう恐れがあるので怖くてできないんじゃないか」

「枯れかけじゃないですか、Dr・G」

「うっさいわ。あんたらも幾ら常人の数十倍の精力誇っているからと言って、あと数十年したらわしと同じようになるかもしれないのじゃぞ！ 数日溜めても『出したくて堪らない』とはならず、出すことそのものを忘れてしまう身体になるんじゃないぞ」

「そうはおっしゃられても、私達だって勃起不全になるのは嫌ですよ」

「お二人なら一時的な現象で済むから。それに、お二人の日常業務である検体サイメン供出だってまだまだ続けていたくださいなんですから、射精に不自由するような身体になんか、わしの方こそさせたくないわい。ただ、実際にどれだけ嫌な思いをす

るものかというのをじゃなあ……」

「うっわあ、すっごいやダ」

「もう、嫌な思いをする、って言い切っちゃってるじゃないですか」

「リハビリの期間も充分に与えますし、勃起強化の仕組みも考えとくから」

「えー、それ聞いても全然やる気にならない」

(こちらは体験版です)

第 2 章

E D 遅漏遺精矯正



(こちらは体験版です)



第3章

性のスーパーマン



(こちらは体験版です)





E D 遅漏遺精矯正装置

OpusNo. Novel-076
ReleaseDate 2021-07-18
CopyRight © 山牧田 湧進
& Author (Yamakida Yuushin)
Circle Gradual Improvement
URL gi.dodoit.info

個人で楽しんでいただく作品です。
個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、
共有、アップロード等はしないでください。
(こちらは体験版です)